

『9 時を過ぎたら』

著：坂井朱生

ill：佐々木久美子

「給料、少ないけどな。ご苦労さん」

ああ、そうか。

夏実が今晚から復帰するなら、よぶんな店員はいらない。渉のアルバイトも、これで終わりだった。覚悟はしていたものの、こんなに急だと気持ちの準備がまにあわない。

「どうした？」

「なんもない、です。今まで、ありがとうございます。でもこれはいただけません」

「ありがとうございます、そりゃこっちの台詞だろ。いいからとっとけ。どうせ、そうたいして入っちゃいない」

「楽しかったから。だから、これはいただけないです」

封筒を返そうとするのに、多岐は受けとってくれない。

「ただ働きはまずいだろう」

水臭いじゃないですかと言おうとして、渉は口を閉ざした。そんなことを言えるほど、自分は多岐と親しくない。

「でも」

「受けとってもらわないと、俺が夏実にどやされる」

「それじゃ、お預かりします」

あとで直接、夏実に返せばいいだろう。ここで押し問答をしても、多岐を困らせるだけだ。

「それと、な。悪いんだが、しばらく店に顔ださないでくれるか」

ずっと顔を背けて、多岐が呟くように言った。

「えっ——」

キンと耳鳴りがする。

今、なにを言われたんだろう。

ミセニ、カオダサナイデクレルカ。

言葉が意味をなさない音の羅(ら)列(れつ)のようで、とっさに理解できなかった。ようやく意味を呑みこむと、ひどい衝撃に襲われる。

(どうして?)

昨晚の、衿子の話の比ではなかった。貧血を起こしたように、ずっと血の気がひく。目のまえがぐらつき、脚にも力が入らない。

動悸がひどく、声は喉につまった。息が、苦しい。

「俺、……なにかご迷惑かけましたか？」

渉は、震える声をようやく絞りだした。

(昨日は、家へ誘ってくれたのに)

少なくとも店をでるまで、おかしいことはなかったように思う。衿子から聞いた話も、誰にも話していない。もちろん、多岐にもだ。

どこで、なにをしてしまったんだろう。どうして、多岐を怒らせたんだろう。今朝から態

度がおかしかったのは、渉を見てもくれないのはそのせいなのか。

「ああ、違う。おまえが悪いわけじゃないんだが」

多岐がとりなすように言ったが、視線は渉を見ないままだ。

きっと、迷惑だったんだ。

なにかはわからないけれど。……もともと、夏実の代わりとして強引に雇ってもらったのだし、そのあいだ、気づかないうちに迷惑をかけてしまっていたのかもしれない。

人手が足りないから、今まで黙っていただけなのかもしれない。

(そうだ。だいたい、俺は多岐さんの嫌なところばかりと繋がってる)

思いたしたくないのは、モデルを辞めた経緯だとは言っていたが、それでも渉はかつて、彼が所属したモデルクラブのオーナーの息子だ。嫌な記憶に繋がっても不思議はない。

そして衿子。渉がかつてつきあっていた彼女は、多岐の実父と縁続きだという。もしそれを、多岐が知ったらどうだろう。

渉は、多岐の神経を苛だたせるものとばかり繋がっているのだ。

傍にいたい。

緊張してもおちつかなくても、多岐の傍にいたい。唐突に断たれた多岐へ繋がる細い糸を、どうにか結びなおしたい。

(でも)

我が俤は言えなかった。彼を困らせるようなことは、どうしても口にできない。

「——はい。わかりました」

言えた。笑えた。

ひき攣って、今にも泣いてしまいそうなのを必死に堪えて、渉はゆっくりと頷いた。どうして、と縋りつきたくなる気持ちを、懸命に抑えつける。

大丈夫だ、なんでもない。

意地を張りとおすことでしか、自分を保てない。弱音など吐いてしまったら崩れてしまう。

「じゃあ俺、着替えて帰りますね」

渉の声に返事もせず、多岐がロッカールームから去っていく。見つめているその背中が、滲んだ涙に揺れた。

無意識に、かつて彼の触れた唇を、指が何度もなぞった。

本文 p193～198 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>